

エルベ河畔のフィレンツェ、 ドレスデンと創立130周年を迎える ドレスデン・フィル

文=岡本 稔(音楽評論家)

text by Minoru Okamoto

ドレスデンはエルベ河の水路を利用した商業都市として古くから栄え、1216年に都市国家となり、16世紀以降はザクセン王国の首都に定められた。17世紀末に王位についた選帝侯フリードリヒ・アウグストのもとで次々とツヴィンガー宮殿をはじめ次々とバロック建築がたてられた。18世紀半ばにはかつてのドレスデン市街のランドマークだった聖母教会が完成、1792年には合唱団で名高いドレスデン聖十字架教会が後期バロックの様式で建てられた。ゲーテは19歳の時にドレスデンに12日間滞在し、芸術の都が誇る数々の美術館を訪問するとともに、エルベ河畔のブリュールシュ・テラスを好んで散歩し、この街の美しい風景を楽しんだという。1841年にはゴットフリート・ゼンパーの設計による宮廷歌劇場が開場し、夢のように美しいドレスデン旧市街の町並みが現出した。



(騎士の行列)

ドレスデンの音楽の歴史は、1548年にザクセン選帝侯モリッツが発足させた宮廷楽団にはじまる。1530年に創立されたミュンヘンの宮廷楽団(現バイエルン州立管弦楽団)にはわずかに遅れをとったとはいえ、シュターツカペレ・ドレスデン(現、ザクセン州立シュターツカペレ・ドレスデン、日本ではドレスデン国立歌劇場管弦楽団という名称で知られている)は世界最古のオーケストラのひとつ。ゼンパー歌劇場の開場直後の1843年にはリヒャルト・ワーグナーが宮廷楽長に就任し(さまよえるオラ



(ドレスデン郊外を流れるエルベ川)



(カトリック聖母教会)

ング人)、『タンホイザー』を初演している。

シュターツカペレは毎夜のオペラ演奏で多忙をきわめているため、オーケストラ・コンサートが一般化し、需要が高まるにつれそれにこたえるのが困難な状況が生じてきた。そこで1870年にドレスデン第2のオーケストラとして創設されたのがドレスデン・フィルである。この年の11月29日に初の演奏会を開いている。当時の名称はドレスデン・ゲヴァントハウス・オーケストラというもので、これは1781年創立の世界最古の民間のオーケストラ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団を思い起こさせる。

ベルリンやミュンヘンといったドイツの大都市では、宮廷歌劇場を起源とする歌劇場付属のオーケストラがもっとも古い歴史を有している。それに対し、主要なシンフォニー・オーケストラは19世紀後半の設立だ。ベルリン・フィル(1882)、ミュンヘン・フィル(1893)とともに、ドレスデン・フィルもその典型的な例といえるだろう。以後、ドレスデンではオペラのピットでの演奏を主な役目とす

るシュターツカペレとコンサート活動を専門に行なうドレスデン・フィルは共存共栄の形で発展を続けた。また、1915年にベルリンで行なわれたリヒャルト・シュトラウスの大作『アルプス交響曲』の初演では、ドレスデン・フィルとシュターツカペレ・ドレスデンの共同演奏でその膨大な編成をまかなうなど、両者の協力によって実現されたプロジェクトも少なくない。

ところが、1945年2月13日に連合国軍の空襲によつてエルベ河畔のフィレンツェと呼ばれたこの美しい都市



(ツヴィンガー宮殿)

は灰燼に帰し、ゼンパー歌劇場やドレスデン・フィルの演奏会場も破壊された。一晩で3万5千人が命を失ったこの攻撃は、戦術上まったく無意味なもので、広島への原爆投下としばしば比較される第2次大戦がもたらした最大の悲劇の一つである。ドレスデンの音楽界がこうなった被害も甚大だった。しかし、ドイツ人にとって、音楽は食物と同様に不可欠のものであり、終戦後程なく演奏活動は再開される。

東ドイツ時代は社会主義体制下で制約は多かったものの、それによって古き良き時代のドイツのオーケストラの響きが今日に伝えられたことは注目し得る。ドレスデン・フィル、シュターツカペレの二つのオーケストラの響きには、良くも悪くもインターナショナル化され、洗練をきわめた旧西独のオーケストラが失ってすでに久しいものがある。

ドレスデンでは今、かつての街の象徴、聖母教会の再建工事が進められている。爆撃で破壊された建物の瓦礫から破片を集めて分類し、その形を一つ一つコン